

吉田茂と防衛大学校

— 防衛大生の吉田邸訪問記

平間 洋一

— 訪問のいきさつ

吉田総理邸訪問のいきさつは、防衛大学校第一期生の卒業アルバム作成の昭和三十二年にさかのぼる。卒業アルバムの編集長であった私は、内外諸大学の卒業アルバムをまず参考のために集めることとし、アメリカ海軍兵学校やアメリカの大学の卒業アルバムは横須賀にあるアメリカ海軍基地の士官や、その奥さんから借りた。国内の大学のアルバムは同期の兄弟や姉妹から借り、集めたアルバムの数は三十種類ほどに達したように思う。しかし、当時は貧しい昭和三十年代の初期であり、外国のアルバムに比べれば、いずれも貧弱なもので、アメリカ陸軍士官学校のアルバムが、一番内容もあり立派であった。しかし、それを業者に見積もらせたところ、大学出の初任給が一万三千八百円と歌われていた当時の金額で、一万円ということであった。

その当時の常識に従って、一冊二千円か三千円程度のアルバムで妥協すべきか否かを迷っていた時、目に止まったのがある有名お嬢様学校のアルバム末尾に掲載されている広告であった。

「そうだ！ 広告を載せよう」と衆議一決。電通の宣伝部長（？）が元陸軍士官学校出身者であると聞いていたので、早速広告募集の依頼に行ったところ、「三百万ほどあればよいね」と気安く引き受けしてくれた。

意気揚々と帰校。一カ月ほどは何の話もなかったが、電通のその部長が友人である防衛庁の高官（政務次官であったと思う）に、「俺は今、防衛大学校の一期生に頼まれて広告を集めているが、一期生の卒業アルバムへ広告が載せられると聞いて、業者はそれは歴史的な価値もあると広告主が殺到している」と語ったことから大問題となってしまう。卒業アルバムに業者の広告を載せるか否かで防衛庁内は大騒ぎ、中央からは榎智雄校長に「学生が卒業アルバムに業者の広告を載せるか否かで防衛知っているか。どう思うか」との問い合わせ。広告を載せると報告すれば「止めよ」というに決まっていると、報告しなかったことから大変なことになってしまった。「とんでもないことをしてくれた。何をするかわからないので、お前はもう東京に行ってはいけない」と東京方面外出禁止を宣告されてしまった。また校長室に呼ばれ、あの温厚なことでは定評のある榎校長から、「いくら学生が作るといっても、防衛庁のレベルで物事は考えなければならぬ。なぜ自分達だけのお金で作らないのか。他人のお金を当てにして卒業アルバムを作るなど以外の。私企業から広告を貰うなどということは認められない」と一喝。散々油を絞られた。

しかし、もう広告掲載を前提に発注済との説明に、校長は仕方ないから私も資金について考えようと言ってくれた。

一週間ほどして校長秘書から校長室に来るようにとの連絡があった。おそろおそろ出向くと、校長は前回とは打って変わって上機嫌、寄付の協力を得るならば、本当に防衛大学校に愛情を持っている人から戴くべきで、吉田元総理と木村篤太郎元防衛庁長官等に話したら、「喜んで出してくれました」

と金一封を渡された。しかし、吉田総理は「どんな学生が出来たかね。学生と直接話をしたかったので、是非とも学生をよこすように」と言われたので、「平間君、今度の日曜日到大磯に行つてらっしゃい」ということから吉田邸訪問となったのである。このようなわけで、この訪問記は品行方正とか学業優秀とかとは最も遠い存在の学生の訪問記である。「どのような学生が出来たかね。家によこしてくれ」と言う総理も総理ならば、このヤンチャ学生に行つてらっしゃいと注意一つ与えず行かせた校長も校長のように思う。しかし、このような校長であったからこそ、吉田総理に初代校長として選ばれたのであろう。

二 吉田邸訪問

それは昭和三十二年の卒業直前の二月初旬のことであった。アルバム編集委員の陸上自衛官任官予定の林嘉彦、海上自衛官任官予定の私、それに航空自衛官任官予定の奥原広人の三名が、こうなったらアルバムに総理の写真を載せなければと、吉田さんの嫌いなカメラをぶら下げて出掛けることにした。

しかし、どこに住んでいるのか。大磯であることは知っていたが、住所を調べようにも調べようがなく、とにかく大磯駅まで行って、駅前の駐在所で聞けば判るだろうと大磯駅に着いた。しかし、あいにくと大磯駅前に駐在所はなかった。通り掛かりの人に、「あの、吉田元総理大臣のお宅はどちらでしようか」と聞いたところ、一瞬げんな顔をしたが、それでも海の方に向かい国道にぶつかつたら、右に曲がり松並木の道に沿って行けば大きな木に囲まれた家があるのですぐ判ると教えてくれた。歩くこと十数分、なんとなく大きな木に囲まれた家があるが門にも玄関にも表札がない。そこで再び屋

敷外に出て通行人に、「ここが吉田総理のお宅ですか」ときくと、間違いなく、この家ですとの返事。そこで勇気を出して呼び鈴を押した。しかし、なかなか人が出て来ない。多少不安になったところ坂本喜代子夫人が現れた。「あら、玄関からはかり思っていたのに、通用口から来るなんて」「どうぞ、玄関にお廻りください」と。なんとということはない大磯駅に近い勝手口から侵入してしまつたわけだ。勝手口から玄関に廻り、玄関右手の応接室に坂本さんはわれわれを案内して出て行った。

落ち着いた風をして周囲を見渡す。正面には世界各国の元首や大統領の写真が四段か五段のボードに並び、目の前のテーブルには菊のご紋章の付いたシガレットケースが置かれてあり、その雰囲気はさすが心臓の強いわたくしもたじたじだった。待つこと数分、階段から人の降りてくる気配を感じたが、まず驚いたのは着物を着て白足袋を履いておられたことだった。総理を風刺した新聞などの漫画に描かれているそのままの姿、まさか家でも白足袋に袴とは思っていなかったもので、そのときの驚きと興奮は今でも忘れられない。葉巻をくわえ白足袋、和服に袴のいで立ちは漫画で見たとおりだったが、その実物がここに居られると思うと身が震えた。しかし、総理は上機嫌で、われわれを愛でるような慈悲に溢れた目で眺め、笑顔を向けられたのにはほっとしたことを覚えている。

学校のことや自衛隊に対する期待など色々な話をされたが、途中葉巻を吸われ、そしてわれわれにも勧められた。おそるおそる菊のご紋章の入ったシガレットケースから葉巻を取り出し、セロハンを剥かずに、また端も切らずに火を付けようとした学生(私であったということになっている)に、君達葉巻は口にくわえて切るんだよと教えられて、また赤面。

次におそるおそる総理は写真と新聞記者が嫌いだと聞いておりますが、卒業アルバムに載せるので一枚撮らせて下さいと申し出たところ、新聞記者には嫌いな人が多いが中には立派な人もいます。しかし、彼らは目先の功を焦ってスクープを追うし、他人の迷惑や国家の利益をも無視する人が多いから嫌い

だ。でも私が新聞記者嫌いというのも新聞屋が作った間違ったイメージで、本当ではない。「また写真も嫌いということになってきているが、本当は好きなんだよ」と廊下に出られ逆光になるからと向きを変えてとの注文にも気軽に応じられたが、「君達が撮るのより出来の良いのを送るから、それをアルバムに使ってくれ」と注文も出されたので、われわれ一期生のアルバムには、その後送られた署名入りの写真が載せられている。

このように写真を撮ったり話したり、タバコで悪戦苦闘をしている間にも来客が有るらしく、坂本さんが何回も取り次ぐが、そのたびに「今学生さんと話している。待たしておけ」の連発。最後はとうとう男の人が入ってきて、「鳩山(他の人であったかもしれない)さんお待ちです」と来たが、これも「若い学生さんが来ているので、待たしておけ」には驚いた。そして、「ソ連を相手に何を話しても話にならない。相手にする必要はないんだ。あんな国は」と言われ、われわれに相槌を求めたが、どう答えたのかは覚えていない。しばらく話された後に、再び坂本さん呼び「学生さんは若いんだから、腹を空かして帰す訳にはいかない。何か食べさせてやりなさい」と言われ、われわれは鳩山さんのために応接室を空け、裏手にある食堂か台所みたいなところ、椅子とテーブルがあったダイニングで大阪寿司を御馳走になり、吉田邸を辞したのは夕方に近かったように思う。

玄関には大勢の人が来ているので勝手口から帰ろうとしたら、坂本さんから「将来のある若い人が勝手口から帰るなんていけません」と注意され玄関から送られた。門まで二〇から三〇メートルはある庭を眺めながら正門を出た。そして、ほっとするとともに現実に戻り、「帰校時間に間に合うかな」との考えがふと浮かんだように思う。

高い松の木があったのと、庭の和風の建物、そのたたずまいが、いまだに強い印象に残っている。帰りは正門から出たが警官が居たようにも思うし、居なかったようにも思う。それにしても現在であ

ったならば、機動隊員が居て、たやすく勝手口から入るようなことはできなかったであろう。学生を大切にし、そして信用し期待してくれた良き時代に育ったことを感謝するとともに、良き時代が過去のものになってしまったことを寂しく思う。

三 総理との会話

会話というよりは総理の一方的な話で、座談の名手という感じを強く受けた。話題は主として防衛問題であったが、国防は国の基本である、しかし、今の日本はアメリカとの安全保障の下に経済復興を図るのが第一で、アメリカが守ってやるというのだから守ってもらえばよいではないか。

また、憲兵に追われ投獄され取調べを受けたが、かれらのものの解らないのはどうにもならなかった。だから僕は陸軍が嫌いだ。昔のようにももの解らない不具の人間を作ってはならない。そのためには東大出身者は固くて分からず屋が多いので駄目だ。防衛大学の校長を決めるには随分考えたよ。昔のような軍人を作らないために。それにはイギリス的教育を受けた人が良いと思ひ、今の楨校長に慶応から来て貰った。ところで、校長の指導方針は何かね、と問われ、上がってしまい「はい、自由と規律です」と答えると、「どこかで聞いたような言葉だね」。「いや間違えました。自由には規律が必要で、規律なき自由はない」とか、「立派な社会人になることが、立派な軍人になることです」とか、答えたように思うが、何を言ったかはあまり覚えていない。総理の一方的な話ばかりだったように思う。

そのなかで、ときもを抜かれたのが鳩山内閣、特に鳩山総理の外交姿勢に対する激しい非難であった。その趣旨は日本人自身もって自分の国に自信を持つべきであるのに、その外交はソ連に行っ

「どうか魚を取らせて下さい」と頼んで逆に脅かされ、中国に行つて物を買つて下さいと頭を下げる。ソ連との外交は脅かすか、利益をちらつかせるか、この二つしかないんだよ。それを誠意を以て話し合ひで行くという。ソ連に話したって聞いていないよ。困った人だなどといつておられたが、二カ月前まで自衛隊の最高指揮官であった元総理大臣に対する悪口に、「はい。そうですな」といってよいのかいけないのか、などと考えたことまでは覚えていますが、何と相槌を打つたかは覚えていない。

また、国防についても話されたが、それは自分の国を自分で守るといふ趣旨は良いが、現在世界に一国でも自国を守れる国なんてありやしない。フランスにしてもドイツにしても、ことごとくイギリスやアメリカの兵隊を置いて共同して守りましようと言っている。アメリカだつて一種の共同防衛をとり、ソ連に対して自由主義国家として共同防衛体制をとっているのに、日本だけが安保反対とかゴ・ホーム・ヤンキーなどと反対などしているが洒落臭い話だ。井の中の蛙大海を知らずだ。日本一國で国を守るなどということは馬鹿の骨頂だよ。頭を働かせるべきで日本一國でソ連に対する軍隊や軍備など持てるものではない。今日独立して自分の国を守る国など一國もない。イギリスにもアメリカの航空部隊がいるし、ドイツやフランスにも他國の軍隊がいるが、これらの國で基地がどうの、反対だなどとケチなこと言っていないよ。よその國の軍隊が自分の國を守ってくれ、自分の國の軍隊が他國を守るのはお互い様なのだ。不名誉でもなんでもない。

もう、一國が自分の独力で守るといふ時代は過ぎてしまつて、集團で國を防衛する時代になつたんだ。その集團の一國が他の國の基地を自分の國に置いて、ちつとも恥かしいことではないんだ。それを馬鹿な奴らが基地を置くことを植民地になつたように十九世紀の頭で考えているのだから困つたことだよ。

最後に、卒業アルバムに載せたいので何か一筆書いてくださいとお願いしたら、わたくしの好きな

言葉「治に於いて乱を忘るな」を書いて上げようと思つている、それから軍人として大切なことも書いてあげようと送られてきたのが、写真に添えられた書であり次に示す一文であつた。

防大生に与ふ

独立國の國民として、國の独立程大事なものはなく、この独立を守る事こそ、國民としての名譽であり、誇りであり、この誇りが愛國心の基礎をなすものである。國民に独立を愛し、独立を守る決心なくんばその國の存在はあり得ない。この決心が一國の興隆繁栄を來すのである。第一次大戦の初め、パリイがドイツ軍に、まさに占領されんとする時、首相クレマンソーは國民に告げて曰く、「パリイの外で守り、パリイの内でも守り、又、パリイの外に於いて守るべし」と。仏國民にもこの決心ありたるが故に、破竹の勢ひを以て、攻め來りたるドイツ軍を遂にパリイの外に退け得たのである。第二次世界大戦において、英國軍が仏白國境に破れて、ダンケルクより三十余万の敗殘兵僅かに身を以て英本國に引揚げ、武器、彈藥、悉く大陸に遺棄し、國內には國を守る何等の兵備なく、ドイツ軍の英國侵入は時の問題と思はれたる時、チャーチルは議會に演説して曰く、「英國内において敵を防ぎ、英國外においてこれと戦ひ、遠くカナダに退いてドイツ軍と戦ふ」と云つた。英國々民の戰闘意識を最も明白なる言葉を以て云い表したのである。クレマンソー及びチャーチルのこの決心がパリイを守り、英國を守り得たのである。然しながら、兵は凶器である。これを用ふるは苟しくもすべきではない。又、これを用ふるにおいてはこれを止むる用意がなければならぬ。所謂、武なる文字は、戈を止むると書くのである。日露戦争の時、児玉參謀總長は、奉天会戦を以て日露戦争を終るべき時なり、と大本營に進言して、兵を収めて日露戦役の功を全うした。この遠謀深慮ありてこそ武將と云うべく、然るに、第二次世界大戦に

おける我が軍は、その勇戦善戦、日露戦争に比べて優るとも劣ることなかりしにも拘らず、進むを知って退くを知らず、遠くブーゲンビル、ラバールまで進出して徒らに大兵を孤島に集中暴露して、日本本土との連絡用意なく、米軍のために我が艦船、飛行機等の壊滅せられるや、遂に本国との連絡絶たれて、大兵空しく、南洋海上の孤島に置き去りにされて全滅し、遂に南方作戦は頓挫した。歴史の示すところは、以って、将来の戒めとなすべく、兵を用ひて兵をとどむるの用意なくんば、善謀善戦も何の益するところなし。

兵を学ぶ諸君、常に茲に心を致されんことを望む。

歴史觀に裏打ちされたこの一文は国防に当たたる者、軍事指導者の留意すべき原点であり、この訓示はその後も自衛官の心すべき諫めとして、防衛大学校では繰り返し繰り返し教え続けられている。

また、総理は帰り際に、「君達は自衛隊在職中決して国民から感謝されたり、歓迎されることなく自衛隊を終わるかも知れない。きつと非難とか誹謗ばかりの一生かもしれない。御苦労なことだと思ふ。しかし、自衛隊が国民から歓迎され、ちやほやされる事態とは外国から攻撃されて国家存亡の時とか、災害派遣の時とか国民が困窮し国家が混乱に直面している時だけなのだ。言葉を交えれば君達が日陰者である時のほうが、国民や日本は幸せなのだ。堪えて貰いたい。一生御苦労なことだと思ふが、国家のために忍び堪え頑張って貰いたい。自衛隊の将来は君達の双肩にかかっている。しっかり頼むよ」といわれた。そして、この言葉が私の脳裏に強く残り、防衛大学校卒業以来、世間の誹謗や非難に堪え自衛官としての道を誇りを持って歩ませ、定年を迎えさせたのもあった。また吉田総理のこの言葉がわれわれ一期生を、防衛大学校卒業生を、低い礼遇や社会的地位に甘んじながら、国家、国民という価値基準に縛り付け自衛官としての一生を歩まし続けているのである。

四 防衛大学校と総理

いわゆる再軍備には頑なに反対していた総理ではあったが、「どんな学生が出来たかね」と自宅に招くなど、防衛大学校には多大の関心をもたれ、生前には前後七回も来校され、わが防衛大学校では創設の父と敬愛されている。

例年防衛大学校の卒業式には総理大臣が来校し、卒業生に訓示を与えるのが慣例となっているが、吉田総理は総理としてだけではなく、総理をやめられてからも卒業式などに来校されたが、特に一期生が在校した昭和二十八年から三十二年の四年間に、総理在任中も含めて多忙な職務にも拘らず三回も来校された。第一回の来校は開校半年後の昭和二十八年十月十七日で、どのような施設で、どのような教育が行われているかを気に留めての来校であったといわれている。この来校に際して施設も何も整わない防衛大学校として何をお見せすればよいかとの議論があり、その時に学生の観閲行進をお見せすることになったが、これが慣例の貴賓来校時の防衛大学校名物、観閲行進の始まりとなった。

第二回目の来校は横須賀の米軍を訪問し、時間が取れたからとの突然の来校であり、第三回目の来校は卒業式であった。第二回目に来校された時は学生食堂で会食し、次に示す防衛大学校の教育の在り方と、まじめに勉強せよとの訓示をされた。勉強せよとの訓示の出だしの言葉が「不肖の息子となるなかれ」という「不肖の息子論」であった。榎校長が総理を本校創設には種々の指導と助言を与えられた、「いわば本校生みの親とも申すべき方で」と紹介すると、総理はその話を受けて「もし、僕が親なら、諸君の出来の悪いのは不肖の息子である」。「まじめに勉強せよ」とジョークで話を続けられ、この時の「不肖の息子」発言以来、だれ言うことなく公式には防衛大学校創設の父、非公式には「オヤ

ジさん」と言われるようになったのである。なお、防衛大学校教育の在り方に関しては次のように話された。

私はいつも思うのであるが、軍人が戦争の専門家に偏することは、戦争そのものには或は強くなるかも知れないが、一般政治や国際外交の常識に欠けるところが生じ、外交を誤り、国を誤ることになる。大東亜戦争などは誠によい例である。総じて軍人が政治を支配することを防ぐことは、各国とも大きな内政上の問題である。一方また軍人自身もその分を弁えて政治に深入りしないようにすることが特に肝要であって、それには広い視野と豊かな常識とが必要である。英国などでは、貴族や富豪階級の子弟が、軍人軍職にあることを名譽と考え、生活または職業のためではなく、真に公職に奉ずる考えから、高い教養を身につけて軍人を志すものが多く、これらは内外に亘る常識を備えており、伝統的にも軍人が政治に関与し、または関与してもらって出世の手段とするを潔しとしない風がある。さすがは英国だとかねてから思っていた私は、特に大東亜戦争の苦い経験に鑑み、警察予備隊ができると同時に、この軍隊に代わる新しい部隊についてその幹部養成の問題に気をつけた。そして特にその常識的教養の面に重きを置いて行きたいと考え、且つそのように努力した。今後とも防衛大学校の現状に満足することなく、ますます内容の充実向上をはかり、単に技術的のみならず、教養的に自衛隊の質を高めてゆく努力を怠らないよう、局に当たるものをお願いしたい次第である。

上に挙げた訓辞は、戦争末期に憲兵隊の留置所に入れられ、その接触した軍人の頑固さ、自分の考えかたのみに固執する偏狭さ、視野の狭さ等を苦々しく思ったその人が宰相となり、かかる将校を決してつくるまいと期した気持がよく文中に出ているが、それを具体化したのが防衛大学校のカリキュラムであり、そして、選ばれたのがイギリスのオックスフォード大学出身の当時の慶応大学評議員で

あった榎智雄校長であった。

このような吉田総理の意向を受け防衛大学校は自衛隊の幹部を養成する学校でありながら、軍事的職業教育は教育科目的にみても、配当時間的にみても少なく、いわゆる普通学と呼ばれる一般大学などで教授されているのと同じ科目を重視しているのである。そして、これが防衛大学校の教育の一つの柱となり、また防衛大学校の教育をユニークなものにしているのでもある。

人間 吉田茂

一九九一年八月十五日 初版印刷
一九九一年八月二十五日 初版発行

編者 財団法人 吉田茂記念事業財団

発行者 嶋中 鷗二

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目七番番 東京二一三四

印刷所 精興社

製本・製函所 大口製本

Printed in Japan

© 1991

ISBN4-12-002040-1

人間 吉田茂